慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』解題・翻刻
Sub Title	
Author	辻, 英子(Tsuji, Eiko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	2008
year	
Jtitle	三田國文 No.47 (2008. 6) ,p.78- 99
JaLC DOI	10.14991/002.20080600-0078
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-20080600-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

バイエルン州立図書館蔵

『源氏小かゝみ』解題・翻刻

辻

熟覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 熟覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 熟覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 熟覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 別覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 別覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 別覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 別覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。 別覧の機会を得た。ここに記して厚くお礼を申しあげる。

一形態・書誌

「源氏小かゝみ 一(二・三・四・五)」とある。見返し・軸付縹地に金泥で霞を引く紙題簽(縦一六・八×横三・二糎)、各々布地に縹、金、緑、茶色で唐草に幾何学紋様の綾。表紙左肩にの冊子五冊。所蔵番号 Cod. Jap. 14。各冊とも表紙は、濃紺本書は、江戸時代の写。縦二三・四×横一六・八糎。綴葉装本書は、江戸時代の写。縦二三・四×横一六・八糎。綴葉装

ることから、これは装丁の際に生じた綴違いと見られる。第三共布が数ミリはみ出ており、すぐ後に「源氏目録巻之二」とある。句読点はない。第一冊は表紙見返しに続く「六 あふえん」までを記す。第二冊(巻之二)はこれに続く「六 あふえん」までを記す。第二冊(巻之二)はこれに続く「六 あふえん」までを記す。第二冊は表紙見返しに続く一丁表に「源氏目録巻之一」(各冊同様)とし、「一 桐つほ」から「五 花の目録巻之一」(各冊同様)とし、「一 桐つほ」から「五 花のおった。本文中の漢字にはまま振仮名を傍記し、時に濁点も加えな行。本文は一筆、一面十行、一行一六~二〇字、和歌は二字下げ本文は一筆、一面十行、一行一六~二〇字、和歌は二字下げ

写した。 師共い4」までとなっている。掲出にあたっては、原本どおりに 十帖」は「一 橋姫うはそく共いふ」から「十 夢のうきはし法の 冊(巻之三)冒頭は「十六 乙女」から「十九 にほふ宮かほる中将とも」まで、第五冊「源氏目録巻之五 宇治 まで、第四冊(巻之四)は「二十 わかな上下」から「廾七 藤のうら葉_

とあり、内書に 奥書はない。付帯文書の包み紙に、 「源氏校合奥書筆者覚」

先にあげた宮内庁書陵部蔵本『小かゝみ』と早稲田大学図

源氏

校合奥書

中院内大臣通茂

高いとみられる。 である可能性は低く、購入時に別書の書付が混入した蓋然性が とある。右の二つは、同筆。損傷部分は縦五・五×横○・七 この校合者名は『源氏小かゝみ』本文付け傍注ルビの筆者

二 『源氏小かゝみ』の類本

乙女」から「廾七」にほふ宮かほる中将とも」まで、「巻下字治したい典いふへし」から「十五」あさかほ」まで、巻中は、「十六い共いふへし」から「十五」あさかほ」まで、巻中は、「十六 および同系統第三類、伝知恩院良純親王筆 分類同系統本第二類に数えられる宮内庁書陵部蔵『小かゝみ』する。なかでも、歌数・本文・跋文を同じくする点で、伊井氏 本書は、 『源氏小鏡』に近い。『小かゝみ 上』は、「一 伊井春樹氏分類による第二系統本(改訂本系)に属 にほふ宮かほる中将とも」まで、「巻下宇治十 早稲田大学図書館 桐つほせんさ

> 多少のずれもあるが、ここでは触れない。 うす雲」まで、中は「十五 もいふ」までとなっている。『源氏小鏡』は、上・中・下三冊 帖」は、「二 のうきはし法の師ともいふ」までとなっている。ただし本文には ふ宮かほる中将とも」、下は「一橋姫うはそく共いふ」から「十 で、各巻頭に目録があり、上巻は「一 桐つほ」から「十四 橋姫ぅはそく共いふ」から「十夢のうきはし法の師と問じる わかな 上下」から「廾七 にほ

学図書館本本文に傍記する「イ本」に近いと考えられる。 衍字・錯簡が多い。バイエルン州立図書館本の本文は早稲田大 歌数は一三三首、いずれも同歌・同配列であることが挙げられ こには省略する。両書とも絵はない。一特徴として、三書とも 直接の書承関係はないと考えられる。早稲田大学図書館本には イエルン州立図書館蔵本は両者の混態をなしており、いずれも 館蔵本『源氏小鏡』とが同系であることについての詳細は、こ ただし本文には各々校合が可能な範囲の出入りがある。バ

『源氏小かゝみ』の価 値

る。 写とされる『けんしのちう小かゝみ』(152-109)一冊 江戸初 と見られる。書写年代については後考を期したい。また、宮内 置に異同がある。その他に絵入版本としては『源氏小鏡』(266 庁書陵部には藤原長親写とされる『小かゝみ』のほかに、 バイエルン州立図書館本『源氏小鏡』は、 同じく『源氏小鏡』(鷹 456) 前缺、 がある。後書は寄合語を有するものの語彙は大きく異な 室町末期写は、歌の配 誤脱の少ない善本

巻一の翻刻を掲載する。あり、これらとの関係も考察する必要がある。ここには続いて338)明暦三年版(三冊がある。無刊記の絵入版本は他所にも

ž

- (1) Eva KRAFT "JAPANISCHE HANDSCHRIFTEN UND TRADITIONELLE DRUCKE AUS DER ZEIT VOR 1868" IN MÜNCHEN Franz Steiner Verlag Wiesbarden GMBH Stuttgart 1986 四三頁に「128 GENJI KOKAGAMI 源氏小鏡」として書誌を載せ、末尾に、「(freundliche Mitteilung von Y. Katagiri)と記す。
- (2) 中院通茂 (一六三一—一七一〇) 皇より古今伝授を受け、長く宮廷歌壇の中心となって活躍した。宝 受け継ぎ、その死後は後水尾上皇より歌学を学び、寛永四年五月上 歌集』がある。内大臣従一位。なお曽祖父通勝(一五五六-一六一 町の廬山寺に葬る。なお日記に『中院通茂卿記』、歌集に『老槐和 永七年三月二十一日没。八十歳。法号を渓雲院といい、京都北之辺 物語』を進講した。『中院通村詠草』上下等(高梨素子編 あり、通勝の男通村(一五八八-一六五三)も後水尾天皇に『源氏 物語の享受資料―調査と発掘―』所収 武蔵野書院 平成九年)が 家系図』)。その他、中院通勝筆『源氏物語絵詞』(中野幸一『源氏 楚』(慶長三年〈一五九八〉成立)がある(『国史大辞典』 『公卿諸 ○)が室町末期にまとめた『源氏物語』の諸注釈書の大成 より家督を相続した。また通茂は祖父通村および父通純から和歌を 六四八)正四位下に叙し、承応二年(一六五三)四月父通純の死に 権大納言高倉永慶の女。寛永八年(一六三一)誕生。慶安元年(一 源氏、久我通親五男通方を祖とする。権大納言中院通純の男。 642・643 平成十二年)もある。 は江戸中期の公家、

うにみてくると、石山寺およびスペンサー・コレクションに残され 書継縣主西池杢助季通筆」(拙著『在外日本絵巻の研究と資料』 細を報告するが、以下に書誌の概要を記す。 する松井文庫蔵『小倉山荘色紙和哥』等については、近著にその詳 も考えられる。そして『源氏物語詞』およびその筆者の多くを共有 ている『源氏物語』の原像は複数の手になる寄合書であった可能性 掘―』武蔵野書院(平成九年)三四一頁)の作品も伝える。このよ 語』享受をめぐる華麗な文化を余すところなく伝えている。 五十四人の筆に成り、一七世紀初頭から中頃にかけての『源氏物 り注目される。大英図書館蔵『源氏物語詞』の詞書は親王、 氏物語詞』「すゝむし」の段に「四辻中納言季賢卿」 書いている。間接的な事ながら、石山寺蔵『源氏物語絵巻』「すゑ 吉如慶(一五九九~一六七○)、署名も朱印もある。如慶には他に つむ花 上」の奥書に「右之端十六行者 四辻中将季賢朝臣自筆 『源氏物語扇面画帖』(中野幸一『源氏物語の享受資料―資料と発 平成十一年 二一三頁、二六七頁)とみえる季賢は、 (38オ) 筆とあ

「源氏小鏡伝本考―古本系から改訂本系へ―」『国語と国文学』昭近似するもののようで、同じ工房の製作によるものと推定される。 と記す。見返しは金紙に銀霞を引き、金銀箔を置く華麗な装丁である。台紙は厚手の鳥の子で、見開きの右色紙に物語の文章を、である。台紙は厚手の鳥の子で、見開きの右色紙に物語の文章を、である。台紙は厚手の鳥の子で、見開きの右色紙に物語の文章を、である。台紙は厚手の鳥の子で、見開きの右色紙に物語の文章を、である。台紙は厚手の鳥の子で、見開きの右色紙に物語の文章を、である。台紙は厚手の鳥の子で、見開きの右色紙に物語の文章を、である。 一種で五十四名の筆者名を記す。付箋左端上に重ね 世の付箋は、全一筆で五十四名の筆者名を記す。付箋左端上に重ね 世の付箋は、全一筆で五十四名の筆者名を記す。付箋左端上に重ね をの付箋は、全一筆で五十四名の実者名を記す。付箋左端上に重ね をの付箋は、全一筆で五十四名の筆者名を記す。付箋左端上に重ね との付箋は、全一筆でより、熟慮し編纂されたものと推定 される。胴金具を四関に打つなど、先に挙げた中野幸一氏の発掘資 を加える。と記さい、表紙は紺地に 『源氏物語詞』縦二三・三×横二○糎の折帖仕立。表紙は紺地に 『源氏物語詞』縦二三・三×横二○糎の折帖仕立。表紙は紺地に

- (4) 第二系統本第二類に属す。書函番号 谷109。縦二四・三×横一和四十二年九月号 東京大学国語国文学会 一六頁。(3) 「源氏小鏡伝本考―古本系から改訂本系へ―」『国語と国文学』昭
- 七・三上(中・下)三冊。 褐色地に金泥で小花を描く中央題簽3 第二系統才第二巻に履す 書商者号 そ107 新二里・三>村一

旧蔵)に、中院大納言道茂卿は「玉かつら」(21オ)の段の詞書を

なお、大英図書館蔵『源氏物語詞』 (OR. 1287 P. F. von Siebold

年(一四二九)七月十日八十余歳をもって病没した。 室町将軍足利義持に厚遇されて安穏な後半生を京都に送り、永享元 魏と称し、また耕雲と号した。ことに国文学・歌道の学芸によって 禅宗法燈派に帰依し、孤峯覚明の弟子の聖徒明麟について、子晋明 とあり、元中六年(北朝康応元、一三八九)に内大臣に任ぜられ 五)に左衛門督、弘和元年(北朝永徳元、一三八一)に右近衛大将 上・長慶・後亀山三天皇に勤仕。天授元年(北朝永和元、一三七 師賢の孫、内大臣家賢の子。父祖の志をついで南朝にあって、後村 た。南北両朝の合一の行われた明徳三年(一三九二)ごろ出家し、 (?-一四二九) 南北朝・室町時代前期の公卿、歌人。贈太政大臣 「源氏小鏡畊雲散人明魏の筆になれり」と記す。俗名、花山院長親 (縦一三・五×三・一)に、「小かゝみ」と記す。薄桃色の付箋に

れ、ついで甲府近郊の興因寺その他で蟄居の生活を送った。 この後寛永二十年(一六四三)十一月十一甲斐国天目山に配流さ 年九月十七日知恩院の満誉尊照を戒師として得度した。法諱良純 り、ついで元和元年(一六一五)六月徳川家康の猶子となり、同五 代門跡に治定され、同年十一月入室、同十九年十二月親王宣下があ 七日誕生。母は権大納言庭田重具の女典侍具子。同十二年知恩院初 八宮。後陽成天皇の第八皇子として慶長八年(一六〇三)十二月十 六九)は江戸時代前期の皇族。知恩院初代の門跡。俗諱直輔。幼称 類に当たる。『国史大辞典』によると、良純入道親王(一六〇三― 書は、伊井春樹氏の分類によると、第二系統本(改訂本系)の第三 は、「下」の末尾に「伝知恩院良純親王筆」と記す付箋がある。本 『源氏小鏡』(函号 へ 12/2415/1-3) 三冊で、(上・中・下)

二一三~二八八頁)の歌は同配列であるが、歌数は全一三七首で 本 (無刊記整版) (『源氏小鏡』諸本集成 岩坪(健氏が提示された第二系統(改訂本系)神戸親和女子大学 3あらき風ふせきしかけのかれしよりこはきかうへそしつ心なき 和泉書院 二〇〇五年

21うき身よにやかてきえなはたつねてもくさのはらをはとはしと

30いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわか身な

31うきめかるいせをのあまをおもひやれもしほたるてふすまのう らにて

学本には、他書にはなく共通する語に次掲の例がある。 なお、バイエルン州立図書館本、宮内庁書陵部、神戸親和女子大

- ・此かたゝかへにはへ付へし(9裏)(「つけへき事」第一系統 京都大学本、「方違あり」宮内庁書陵部本等
- ・御心れいならすさま~~におはしましてよのえけ(岩坪氏は 「穢気カ」と傍注する。他書には、「さはき」トアル)にて

バイエルン州立図書館蔵『源氏小かゝみ』

桐つほ せんさい共いふへし 源氏目録巻之一

はゝき木 并うつせみ 并夕かほ

若むらさき 并すゑつむ花

Ξ

Б. 74 花のえん もみちの賀

1オ

(遊び紙) 1 ウ

桐つほといふ巻の事大内のうちに有御殿。 の名なりしけいしやと申は桐つほの事也 へまいり給ひしそかし御門ことの外にと ち名たかき聞えありて御宮つかへに内 父は大納言にて失にしひとの子なり御かた かうる一の人なんとの御むすめにてはなし さてこそきりつほのかうゐと申けれ此 此きりつほに光けんしの御母さふらはせ給ふ

御母かうゐかくれ給ふやまひかきりなれ にや有けん此宮三になり給ふ夏の比 やすからすあさ夕みやつかへに付ても 人の心をのみうこかし恨をおふつもり ほとそれより下らうのかうゐたちまて は

そねみ給ふさる程に此かうゐの御腹にわ

かみやひとゝころいてきさせ給ふおなし

きめかせ給へはかたへの女御かうゐみやす所

2オ

て御心さしのせつなれはてくるまのせん れは御いとま申てさとへ出させ給ふせめ 大内のうちにて人のかくれ給ふ事なきな 2 ウ

るされさりしをあまりなる御心さしな しを給はりて出給ふ此車いみしきくは しよくの事なれはおほろけの人にはゆ

その折のことは

あつしくなゃまし事いきもたえつゝ苦しき事 おたきのさほうかうるのたひなりかきりのつかひのかう

にして物も申やらさりしか哥に せ給ひてさまく、のことのたまへともたえく さて大内を出給ひしおり御門御なこりおしま かきりとてわかるゝみちのかなしきに 3オ

是はかうゐのかきりの哥そかし御心のま かまほしきはいのちなりけり

又よのそしりをおほしてうせてのちさ ほしめしたりしかとかたへのそねみとも ならはきさきのくらゐにもなさましとお

ゐををくらせ給ふかきりの御つかひこれ うの所へちよくしをたてゝ三位のくら

かうるの母もおなしく内にさふらはせ なりかくて秋にもなりぬかのうせにし 3 ウ

物あはれなる夕くれに内よりかの御さと まつりてさとにすみ給ふ風のわきたちて 給しか若宮御いみのほとなれはつれたて

とにもつくへしそのほとのことは につかはせ給ふなき人のあとなれはふるさ

ゆけいのみやうふといふ女房を御つかひ

雲の上人大内に宮 やへむくら 露をきそふる 虫のねしけき みやきのゝ小萩 す うむし 浅ちふのやと

— 82

みやの御ことをよみ給ひ候御哥 し御門よりの御ふみにかうるの これらはかうるのさとにての事なれ 人のやとなといふ事あらはつけさせ給ふへ 母のもとへ若 は 4 オ

とよみ給ひしなり扨この御つかひ帰りけ はきかもとをおもひこそやれ やきのゝ露ふきむすふ風のをとに

るをくり物にかうるの残しをかれたるて

れてうせし人なれはそのこゝろねも有へし 人なとつくへしかのかうゐの人にそねま のかれしよりこはきかうへそしつ心なき なりかうるの母あらき風ふせきしかけ と「免」ノ誤カ)) く物をとりいたしつかひたりし 4 ゥ

さうせらるかのはかせ此宮の御かたちの光か かうらいよりはかせわたりたるに此宮を すなに事にも人にはことなりその比 し給にことふゑのねにも雲井をひゝか

源氏七の御としより御文はしめありかくもん

かのはかせあひしところこうろくはんなりい 源氏といふなりそのほとのことは の四つかなりけんしうゐかうふりといふこと 文つくるなみつくる 四つか 七年けんしその 5 オ

もとゆひ

こきむらさき

盃のついてかの

みとつけたてまつりしより此けんしを光 やきうつくしくおはしけるにめてゝひかるき

を出さるゝ事うへよりおり

さの末た、人になり給へは宮たち

ゆるひかるけんし是なりかのけんふくの日ひ なもと れの大臣のむすめにみかとはからひにてあ の氏を給はりてたゝ人となり給ひい けんしのきみ十二にてけんふく其日み

5 ウ

もとゆいのこきむらさきといふ事は宮なと もとへおはしますこれをあふひの上とは はせたてまつりやかてその夜かの大臣)御けんふくのおりこむらさきといふ糸のひ つ

らくみにてもとゆいをとる事

おやなといふ事侍るその心にやとおほえた それによせたる事なり又あふひの上の 大臣ひきいれに参り給ふふけなんとにゑほし

につくへし又此巻にかゝやく日の宮と申人は 藤つほのきさきの事なりけんしのま るこれらはかうふりはつもとゆいなといふ事

6オ

もあくるをしらすとおほしめしくるれ くおほしめしあしたにおきさせ給ひて て御心なくさます年月ふれともわすれ れてのち御門おほしめしなけかせ給ひ 母なりこの后はけんしの御はゝかうゐ かた かく

御とのゐもなし雲の上もなみたにくれて かたへの女房たちの御つほねもすさましく むなしき御床もさひしく思めして

あけまさり給はるしゃうを

-83

なとなけかせ給ふほとにみかとの御ため すくれて聞え名たかくおはします姫君 にめいにておはします四のみや御かたち

> 6 ゥ

聞えさせ給ふをないしのすけとのとい をかしつき御母きさきなとのいみしく

御心もなくさませ給ひて御心むかしのかう し女房きこえ出し参らせ給ふやう〳〵に

ゐになすらへ給ふけんしをひかる君と申せ

なりこの宮をけんしおさなくよりおほ 日の宮とよの人申けり御つほねは藤つほ は此姫宮かゝやくやうにおはしませはかゝやく 7 オ

しのひ~~に参り給ひて御子一人出き給ふ けなく御心にしめたてまつりてつゐに

つほの御門とけんしの父御門を申事此 れはせいゐんと申せしは此御事なり又桐

かとはゑんきの御事とみえたりよく つほの御門と申なりたとへたてまつる御

巻より見え給ふ主上にてましませは桐

〔絵一〕 8オ

二等木

く、心えへし 7ウ

此巻にあま夜の物かたりとい あところにおはします御つれ/<nなく)君御物いみにて御かたゝかへに大内のとの ふ事はけんし

> かの君とむまのかみとう式部といひし 源氏の御こしうとあふひの上の御あに さめにや其ころとうの中将と聞えしは

物かたり申つゐてに人のしなをわかちよ 天上人参りてくまなきすき物ともなれは

しあしをさためきこれをあまよのしなさ 8

ゥ

ためといふその時のことは

一のまちっしのこ ひるますくせ なてしこ物かたり 文はかせのむすめよ物かたり

てをおりて これらは物かたりとこゝろえへしゅなく物かたり きくのやともなのかみ

内侍のかみの事をなてしことかたり出し

てしこといふ事あらは玉かつらと心得へし たり母は夕かほの上そかし物かたりにな

扨このかたたかへ四月也節分ならてはかたゝ へはせぬ事とはおもふへからすむかしの上 か

はんとするにふたかる方にてわろし御 扨御ものいみあきしかはさとへ出させたま らうは四季にかたゝかへといふ事有し也

てかたゝかへありかの家のあるしよろこひ いゑ人のいよの介といひしかもとへおはし しこまる此 (かたゝかへにはへ付へし

しはかき すゝしきかけなと

此巻にとうの中将の物かたりに玉かつらの

9オ

-84 -

ひ入てとかくの給ふにをんなおもひかけす御うへをそいひけるしつまるほとにしののひて女とものねたる所へおはして立きゝのひて女とものねたる所へおはして立きゝらかりしゆへに心得おはしてかたゝかへありられまのすけか家のやり水せんすいなとおもしいよのすけか家のやり水せん

9ウ

の京極川なりかたゝかへにつくへし此

かすならぬふせやにおふるなのうさにかすならぬふせやにおふるなのうさに

るこゝろねをひけしてよみしなりさてかふ人もなけれはおもひのほかにかくてゐたへき人にはあらねともおやもなくて見あつへき人にはあらねともおやもなくて見あついひけれ此人はわかしななともおもひあかりとよみしゆへにこそ此巻をはゝきゝとは「10オ

とかくいひてほのかにあふそのまゝにてしは

〜立より給ひしかともつゐに又もあひ

条院のひかしのたいにすませられきいあまになりたりしをむかへ給ひて二わすれさせ給はていよのすけしゝてのち(10におもひ給ひけるとかやすゑのよまても(れてまつらすいよ!\けんしは御心つくしたてまつらすいよ!

ゥ

よのすけか家はなかかはわたりなり今

むをひくこのやとにきくもみちなとむをひくこのやとにきくもみちなとむをひくこのやとにまかかよふ女房のおもふに我ゆく所なり浅ましとおもふにこのおもふに我ゆく所なり浅ましとおもふにこのおもふに我ゆく所なりだましとおもふにののではわかかよる女房のおもふに我ゆく所なりだましたおもふにことをかたりとなったりになてしこと玉かつらをかたりかたりになてしこと玉かつらをかたりかたりになてしこと玉かつらをかたり

つれなき人をひきやとめけることのねも月もえならぬやとなから

ありけるに

とよみたりそれより此女のもとへゆかす

きみの御ことをく恨みなんともせすうちなみたくみて姫

りあるときとうの君おはしたるにさかしいふときゝてかすかなる家にかくれてゐた

山 はれはかけよなてしこの露 かつのかきほあるともおりくくに 12 オ

とかたり出してもなみたくみたり此 とよみてそのゝち程なくゆきかくれたり

なにかしのゐんにてしにきなてしこは 人そかし夕かほの巻にけんしにあひて

玉かつらなり十七の巻に見えたり又

よひしにあるときゆきたれは物こしに しきふか物かたりははかせのむすめのもとへか

のさうやくふくしてくさきによりてあは いひかはしてあはすいかにとゝへはこくね

すといへり六月のからひるといふ物にや此

12 ウ

ひゐたらめとおもひてかへりしなりしき かあさましくくさしおにとこそむか

ふか歌に さゝかにのふるまひしるき夕くれに

ひるますくせといふかあやなき

とよめり女の返しに あふことのよをしへたてぬ中ならは

とよめりそのまゝゆかすまめ~~しき

ひるまもなにかまはゆからまし

のおもふやうならぬところをうちみたれて 人はかくはたこは~~しくむつかしく世中

13 オ

心いてきさせ給ふとかやひるますくせと かたりしよりいとゝけんしはくまなき御

はこれなりくはしくは

はゝきゝ

かんよう

に有

なり 13 ウ

空蟬はゝき木のならひ 14 才

此巻をうつせみといふことはゝき木の巻の

かすわすれぬことにおほしめしてかの家 かたゝかへの時いよのすけか女を御らんしてあ の

やりみつおもしろしとてにはかに又かれ かもとへおはしますあるしはやり水のめ V ほ

りていかにしていひよらましとおほしめし てまつらすむなしくかへり給ふ猶御心にか くとよろこふされともその夜も女はあひた

にてあねのもとにありしをめし出して

やかて天上させて我御いゑ人になしてい

きみを御つかひにて御ふみあり其後いよの 此わらはにくはしくいひしらせ給ひてこのこ とをしみふかくし給ふ人その御心をしらす

このこきみをつれさせ給て一車にめして すけゐなかへ下りて人すくなくなるおり

かのなかゝはへわたり給ふみな人は此おさなき

てかの女のおとゝいまた十二三はかりのわらは 14 ウ

86

内にかくれて人しつまりてかのこきみをしる そのほとのことは めのにしの御かたといふそこうちてゐたる へにてのそき給うかしこにはまゝむ 人はかりきたるとおもひされは源氏は御車の ともしひまっかなる ゆふやみ 道たとくへしき程 こきみ 十とを かひまみ くるま

三十みそ 四十よそ

まる程にしのひいらせ給ふにかの女はとけて ちはてもろともにふすを御覧してしつ 碁うちはてゝかそへたる心なりさて碁う 15 ウ

これは此おりのことはにつくへしにしのきみ

こう

めのかくるゝとおほしめしたれはこれをは かくれぬこれはおなしところにねつるむす ねられねはいととくきゝしりてすへり

またゝひのかたゝかへなともこれゆへそと めにあひ給ひておこかましかるへけれはあ きぬはかり残したり心ならすこのむす のこしをきてかくれぬせみのもぬけのことく

給はすその後一よの情に軒はのおきとむ かとももとより御心さしあらされは又ともあひ 、はすはの御哥あり

16 オ

のかにものきはのおきとむすはすは

八のおもはんとおほしてかたらはせ給ひし

15

オ

なかはは露にうへもれにけり

ほのめかす風につけてもしたおきの

御返事にしたおきとよみたりし程にこ の人をはしたおきとも軒はのおきともつ

もつけへしおなしことなるへし扨御心さ くへし心ならぬ事にもたゝ一夜のことに しの人ぬきをきたりしきぬをとりて

16 ウ

へり給ふこのことは

とりて帰るきぬヒヒ巻の 人にしむ

扨そのあしたの御ふみあり なを人からのなつかしきかな うつせみの身をかへてけり木のもとに

みな夏の事なりうつせみにはいかにも人たかへ さてこそうつせみとは名つけけれこれ 夜のちきりなとひきあはせてつくへし 17

17 ウ

め ふかほならひつの

聞えしはせんはうとてとうくうにてか くれ給ひしみやすところ六条あたりに いとやん事なくておはしましきこ 此巻夕かほといふ事は六条のみやす所と

れは桐つほの御門の御弟にておはしま

のかことをなにゝかけま

-87 -

五条なる所にゆふかほのさきかゝりたる おもひたてまつるしはくへかよひ給ふ道 まいり給ふおほけなきことゝよの人も めしけり此みやす所へけんし忍ひつゝ はしますをもうちのみこのことくおほ いとあへなくおほしめして姫宮のお しきとうくうにてかくれ給ひしかは 18 オ

そはゝきゝの巻にとうの中将のかた りてすめるすきかけ見えてけり是 こいゑあり内に女房ともあまたよしあ

りし此姫君のはゝのかくれてゐたる

たりのしのひありきに御車をたてゝ 夕かほのはなの白く咲てあるをなにの ところなりあるゆふくれにれいの六条あ 18 ウ

花そとゆの中将そと
見にをきて

きのいたくかうはしきをたてまつる まいらせよとてはなを折て白きあふ

そのほとのことは 白きあふき こかしたるといふはき 事

ひかき うちまねく きりかけたつ物とらせたるものやりとくち そらめたるこゝろ すきかけつくへし たそかれ時 小いゑ

扨けんしの御哥 よりてこそそれかとも見めたそかれに 19 オ

> さてこそ夕かほの巻とはいふ女房をはゆふ かにも夕かほに人たかへわろくはあるまし の~~見つる花のゆふ

れみつにおほせつけてよく~~案内さ かほのうへといふかくてけんしのめのとのこ

あやしくおもひなからあさからすかよひ 中将のかたりしなてしこの母にやと せてときく、おはしましぬこれとうの

きになにかしのゐんへいさなひ給ふ其 給ふほとに秋にもなりぬ八月十五日あかつ

19 ウ

夜はかの小家にとゝまり給ふにとな

りのいゑにめさましてきゝしらすか

たはらいたき物かたりなとするその

ほとのことは

これら夕かほの小家につけさせ給ふへし からうすのをととなりぬかつく みたけさうしたうらいしひらたつ物きるもの

とおかむをきかせ給ひてちやうせい殿 さてもみたけさうしにみろくしそん 0

もひきかへてみろくの世をねかひて五十 六おく七千万歳とおほしめしけるにや こんよもふかきちきりたかふな うはそくかをこなふみちをしるへにて

20 オ

はねをかはしえたをならへしちきり

おきなかつなとちきらせ給ひしに十

-88

あはれなる扨十五日のあかつきひとつ 六日のよなかにしに給ひしそまことに

車にてなにかしのゐんへいさなはせ

給ふしのゝめのほのかなるに露のひかりや かゝとの給へは

20 ウ

ゆふ露にひもとく花は玉ほこの

たよりに見えしえにこそ有けれ

かへし

ひかりありとみし夕かほのうは露は たそかれ時のそらめなりけり

かしの院のあれたるにおきふしかたらひ なとゝいひかはして十六日一日はかのなに

てくらし給ふそのことは

しのゝめいさなひしあかつき しりめ

ふせいしのみんの

あれたるやと

とりのからこゑなきてをそろし

いひやるかたなし

とひしく〜となりしなりこれらも心え

れみつをめしておほせあはせてきよ てつけさせ給ふへし扨いかにせんとてこ

つゆのひかり おなしくるま

水くさにむもるゝ池

つるうちとのみのすいしん たえいりぬれは

けんし御太刀をぬきて持給ふ物のあしを

きからをとりいたしてやるなきからを みつにこれみつかしる人の有かたへむなし

> てゆく心のうちおもひやるもかなしさ ほれ出てめもあやなりこの車にかのつ かへしうこんといひし女はうのりそひ

れはきよみつなといふことも人つけた

あへなくあさましくおほしてこれみつ りとも難すへからすさてけんしあまり

からを御らんしていとゝおもひまさり給ひし をめしくして清水まておはしてなき

22 オ

かうちかはし給ひしまゝとりいたした れはわかくれなゐの御そのまゝきたり

み入せ給ひてかへらせ給ひてやかて御心れ し面影いかならんよにかわするへきとしつ

えけにて秋のすゑにそをこたり給ひ いならすさま~~におはしましてよの

いみのすくるまゝにめしよせてつほ しまことにことはりなりかの右近をは

女といふこれなり後に玉かつらの君に 給ひてつかはせ給ふふくらかに色くろき ねなとしていとねんころにはこくませ

ひしなりけんしもはかくへしき物に わたしたてまつりて此御かたにさふら はつせにてゆきあひて六条のゐんへ

めしつかひ

21 ウ

うはむしろにをしつゝみて出せはかみこ

89

し初てなかき世のともとなるこの人 りとてこそ式部の君はむらさきしき 給ひしゆへ此巻をはわかむらさきとか にておはしませはさうなくにさせ給ひ に此むらさきの上は此藤つほには御めい にあらぬ世中もうらめしくおほしめす さむとおもひしゆへなりなすらひた 心にかけていかにしてかとやるかたなく まゝはゝの藤つほの宮をおさなくより とよみ給ひしゆへになりわかむらさき うへのおさなかりしをよみ給ひし哥けんし この巻わかむらさきといふ事むらさきの ふとは付させ給へりさてもこの君を御覧 けりことさら此巻おもしろく作りた ゆかりなといふ事なれはよそへてよみ しゆへに物のゆかりをはむらさきの草の 人のかすを御らんするも我此御心やなく とはわかくおさなき心なりこれはけんし 手につみていつしかもみんむらさきの ねにかよひける野へのわかくさ 23 ウ 人なり 23 オ 24 ウ 24オ 出ぬ事にてまいらすさらはとて北山 御としわらはやみをして北山にたうと めさせ給ふそのことは したるをのそきて御らんしはし ましけるに姫君をもつれておはしま 程に祈りなとせんとてこの山におは うつのあねなりこのうは君心なやみ給ふ おこりおとしたるひしりの御てしそ てのそかせ給へはかのひめ君のうはは此 めるところ有なに事にかとおほし 處かしこをのそき御らんすれは女房のす 御かちにまいり給ふつれ~~なれは立出て りおそろしとて其日とまり給ひて まつりたれはおこらせ給はすなをのこ おはしますかのひしりかちしたて きひしり有とてめしけれとも京へは ゆへ雲かくれ給ひしことはけんし十七の こしはかき わらはやみぉこり心のやみいるへの山とも 藤さくらにつくるつほ みやまおろし たひねのそて まつのとほそ かいまみ うしろの山 すゝめのこ 人のな 夕くれのかすみ たきのをと わかくさむらさきのうへの事 山のはなまたさかり くさむしろ たつの一こゑ

25 オ

25 ウ

りもとむる御もてなしのさかななり やりみつ ひしとりもおとろくとなり 26 たにのそこまてほ おとろくけんし北

なちかきおさなき人のてすさい 是は北山にての事はかりなり

此北方は北山におはしますむらさきの みやの御むすめ藤つほのきさきには御 此むらさきのうへはせんていの御この兵部卿 がめい

をのそきていかにしてかこれを取た なり扨この姫君のうつくしき御かたち にそそたてられておはしましける 26 ゥ

り御はゝにはをくれてかのうはきみ うへのうはの御むすめなりおさなきよ

てまつりてわか御まゝにかしつきたて

おほしめしてかのそうつにとひたてま

をくれて京の殿にかすかなるすまゐに

ておはしますをとりたてまつらせ

君十の御としなりかのわらはやみして したてまつりもてなしかしつき給ふ姫 給ひて二条のゐんのにしのたいにわた

北山へおはしませしころは三月卅日なり

27 オ

てかの御かたみにも見たてまつらんと つゐにその年の九月の比うは君に つり給ふうは君ともいひよりなとして

> きといひしわらはにかしたりしをむら さきのうへすゝめの子をかひ給ひしを にすゝめといふことつくることこれは くらはまたさかりとはいひたれ又北 さてこそ京の花はさかりすきて山 むら X

御すかたのいとうつくしかりしを源氏 君御らんしそめてけりからすといふ事 さきの上いたくおしみてなき給ひし

の一こゑといふは又見給へとの給ふ声を源氏聞の一こゑといふは又紫上源氏いらせ給ふをうは君 つらんと少納言のめのといひしなりたつ にけつるすゝめの子をからすなとや取 もありと人いふともあらかふへからすか

がく云也此巻にくさのむしろやり水いも給ふて しをよひたてまつりたまふ時くさの みなとゝいふ事是はそうつのはうへけ

しんの事なりこれならすいもゐとは と申されたるなりいもゐとは御しやう みむしろもこなたにこそまうけ侍らめ

らす御心まきらはしに人々立出てところ かたりといふ事ありといふ共あらかふ しやうしんの事なり又きたやまに物 /〜御らんするにもいとおもしろけれは へか

あかしの物かたりをめいしよなれは申い たり其時あかしの上の御ことをもきゝ ともの人々ふしの山 なにかしのたけす É たし

O 27 ゥ

たはかりひいろのきぬをきせたてま はの御ふくの中なれともわさと其あし 氏のとりたてまつり給へはいまた御 九月に御うは君にをくれて十月に源 きぬをきたまへりといふ事のありこれは のゐんへむかへたまひしあしたひいろの そめ給ひしそかし又むらさきの上二条 つりたるかとおほゆこれをはひしなり

見えたり 29 オ

は御とんせいの事なり廾五の巻に しもこのなけきゆへなり雲かくれと 五にてかくれ給ふけんし雲かくれ給ひ といふなりかくて御心さしなからふかた

なくてけんし五十三むらさきのうへ四十

[絵五] 29 ウ

かすかなる御すまゐにてなかめすこし 御あとに姫君一人のこりておはしきい 申ふるき宮おはしましきうせ給ひし ح

此巻すゑつむ花といふ事ひたちの君と わかむらさきのならひ

にけんしの御めのと少将のみやうふとて くおほしめして尋たてまつり給ひける 給ひけりけんし聞つたへさせ給ふてゆかし

内にさふらひけるか此宮にしたしく

のかすにいれて二条のゐんひかしのたい かたくいたはしくおほして後にはかた! 我ならてはたれか見たてまつらんと くやしくおほしけれとも此すかたをは おはしけり見そめたてまつりけんし くはなたかくさきあかくさうのことくに たてまつり給へりいとおもひのほかに かしけにおはしけりこの御かたち色しろ れにおほさるゝ人の御ほといひすて お 30 ウ

にすませ聞え給ふけんし

なつかしき色ともなしになにゝこの すゑつむ花をそてにふれけん

たる人これなり此君を心にくゝおもひ ことしことにふれておかしきかはきぬき には御かほにあかきこのみをつけたる ゆへにすゑつむといふ此君さむきおり あかき物なりすゑをつみてとるなりこの とよみ給ひしなりくれなゐは花のすゑ

見あらはしてそのかたに源氏の御そてを むとてあとにつきてゆきてつる かけて源氏のおはしますを見あらはさ てあふひの上のあにのとうの中将も心

31 オ

かへてとうの中将 もろともに大内山はいてつれと

参りかよふ人なれはみちしるへして見せ 30 才

二月十六日の事なり此姫君きんのことを 内山はつくへしかはきぬすゑつむ花に わひ人春のいさよひもろともに出し大 ひき給ひしなりあれたるやとのちきり . るかた見せぬいさよひの月

見をとりして

つくへしとうの中将にはまことなしす

31 ウ

しき

やうを

〔絵六〕 32 ウ

紅葉質

むありてんしやう人宮たちもそのきりやう てもみちのかといふ紅葉のしたにてれいし なれはもみちをもてなしにて御かありさ のゐむの御かをつとめ給ふにころは十月 此巻もみちのかといふ事桐つほの御門その比

き事たとへんかたなしかたてには御こ かいはをまひ給ふにしくはなしうつくし たるはまひ給ふそのすかたけんしのせい

しうととうの中将まひ給ふけんしには

33 オ

御子にておはしけれ共御門これとはしろ

たちて御まへのきくおりてかさしかへ て御かほのにほひにけをさるれは左大将 そ見えしかさしのもみちいたくちりすき けをとされてはなのかたはらの深山木と 給ふゆふはへのすかたかゝやきてそゝろ

さむきほとなりそのことは さしかゆるきく ゆふはへ

あしふみ

か

ほのにほひ

楽はせいかいはなりあをうみのなみとかけ 木たかきもみち

たをも御らんしつらんとおほしてしのひ 藤つほのみやへけんしより我まひのすか れらを引あはせつけ給ふへしその夜 りたちゐにつけてといふ哥あらはこ

て御ふみあり 物おもふにたちまふへくもあらぬ身の

とよみてたてまつり給ふ御返事に たちゐにつけてあはれとはみき から人の袖ふることはとをけれと 袖うちふりしこゝろしりきや オ

子うまれ給ふこれはまことはけんしの るにや扨此巻に藤つほの御はらに御 きひのけいしやううゐのまひをよそへけ とありしなりから人の袖ふることはたうやう

33 ウ

— 93 **—**

泉院と聞ゆこのことは にてとうくうに立給ふ十一にて御位に つかせ給ふ御治世十八年なりこれそ冷 しめさすたくひなき御おほえにて五

なてしこ つゆけさまさる 34ウ

是は此巻に候へはとて紅葉なとには付へ この世の中 むかしむすへる契り

又此巻にけんしうちの女房けんないし からす此巻に有ことはなれはしるす

のすけといひて其ころ年五十七八の 房にたはふれ給ふ其ことは 人なりけんしは十九になり給ふかの女

ひはのね此ないしひわひく おやのおや 雨のなこり あふき

ひは ゆふ立

あつまやうたふ

うんめいてん是等は

35 オ

すこしはれたるなこりに内侍ところの おはします御とのゝかたさまをけんし

てかひしらへて居たりし所へ立より給 き給ふに此けん内侍のすけひは上手に たゝすみてあつまやうたひてうそふ

はせ給ふ内侍のもとによるおはしたる時 りくしはてゝこれを御らんしてわら ひて物いひかはし給ふ扨うちのかた御けつ とうの中将きあひてけんしの君をそ

らおとししてのちまてのわらひくさ

としたりしなり 此巻に

なれは

[絵七] 36 ウ

Ŧī. 花りまた

殿のさくらさかりに花のもとにて御あそ のつきのとしの春大内に花見あり南 此巻はなのえんといふ事はかの紅葉の賀

ひあり題を給はりて宮たち公卿殿上人

けんしの御こしうとのとうの中将は春の ちけにいたるまて詩を作り給ふ中にも

うくひすさへつるといふ題を給はりし

くう朱雀院なりけんしには御あにせち おほしめし出させ給ひてそのころとう なり其後去年のもみちのかのまひを

37 オ

まひしかおもしろさに御そかつけ給ふ是 給ふとうの中将たちてりうくわゑんを にせめさせ給へはけんしもたちてまひ

ある事

しるす

付へからす 36 オ

りき給ふほとにこうき殿の三のくちに にのあたりをしのひうかゝひたゝすみあけんしさりぬへき隙もやとれいの藤つ花にもまひはくるしかるましさてその夜花にもまひはくるしかるましさてその夜れは後のよのためしなとゝいふ事有へし後代のれいとなりぬへしといひあへりさ

く物そなきとなかめし程にけんしてのこゑにはあらておほろ月夜にしたち給ふ内よりわかき女房のこゑのなへ

37 ウ

人ゆへそかしすまのわかれのうかりしはいとおもしろくおほしていひよりて此

此女房はとうくうの御母こうきてんの

くうに参り給はんとてもてなされ女御の御いもうと六の君とてとう

あかつき御さとよりの御むかひの人々に内へまいり給ひてとゝまり給ひたるへししか此花のえんのまひ御らんの為に

38 オ

三のくち あふきゕたみの事て心得給ひしその程のことは

をさゝはら おほろ月夜くさのはら 露のやとり

くさのはらをはとはしとやおもふうき身よにやかてきえなはたつねても

ないしのかみ

こさゝかはらに風もこそふけいつれそと露のやとりをわかむまに

38 ウ

内侍のかみのあふきはさくらの三えかさね葉あふきをはしるしにとてとりかへしなりとよめりこれらはこゝにてよみし哥の言

)(ひ))にによな))ので、毎年7月をあらしなといふことはよかるへし此花心えてつくへし立よりし三のくちなにかすめる空の月を水にうつしたり

にてあるへし比は二月廾日さてしのひ~~のえんのまきにはかのあふきの事名句

てとうくうの御よになり給ふまゝはゝ

こうきてんのあしきさき心のまゝに御

にあひしこと聞えて御門かくれさせ給ひ

39 オ

世をとりをこなひてもとよりにくし

まへなかす扨こそ六の君もつゐに女とのことなれは九の巻にけんしをす

御とたにいはれすないしのかみ

まし

けれ 39 ウ

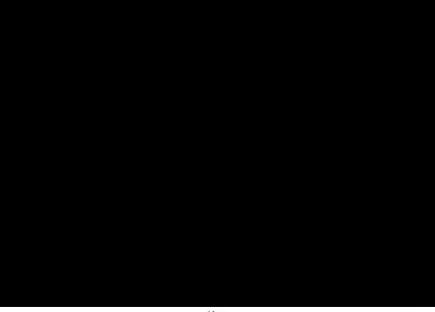
(本研究は平成20年度科学研究費補助金による)

〔絵八〕 40オ

けんし







絵二

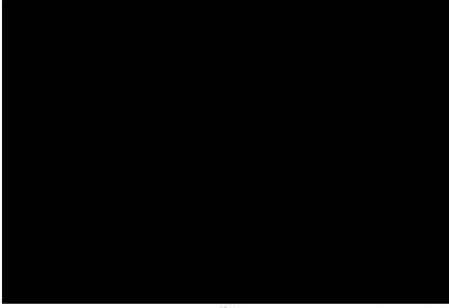


絵三





絵五



絵六

